

09・シーラは永遠のしもべ

トラック08から十数分後。

五月二十日。十九時ごろ。

場所は主人公の自宅、庭園。

## SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【0—8秒ほどまで流して『シーラ』のセリフ】

【その後、ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

主人公とシーラ、服を着直した状態で、抱き合ってガゼボにいる。

セックスの後特有の、とても眠いけれど、寝るのは勿体なくて、なんとか起きていよう  
としている状態。

〈主人公〉

「そういえばさあ」

そんなまったりとした甘い空気の中、主人公は、ふと気になって切り出す。しっかりと抱きついて、シーラに密着した状態で話しかける。

●正面 【※15センチほど上※】 0センチ

「優しく続きを促す。」

主人公が何か話そうとしているので」

うん……?」

〈主人公〉

「ちよつと、シーラに聞きたい事があるんだけど」

だが、この話題は、今までのものとは大きく違うため、少々唐突である。当然シーラは主人公が何を話す気なのかもわからず、首を傾げている。

SE 2 シーラが身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

シーラ、主人公と話すために顔を近づける。

これによって、声の位置が変わり『正面 15センチ』になる。

● 正面 15センチ

「『少し不思議そうに。』

主人公が何を聞こうとしているのか、見当がつかないので」  
あら。

何（なん）でしょう」

〈主人公〉

「今の現国でやってる、小説の事なんだけど……」

● 正面 15センチ

「『ああ、その事か』という感じで。

主人公が何を話したがっているのか、これだけでおおむね理解できた気がするの」  
「ああ」

だが、まだこれしか言っていないというのに、シーラは何かを察したような顔だ。  
すでに質問の内容がバレているような気がして、主人公は恥ずかしくなるが……そのま  
ま話を続けた。

● 正面 15センチ

「【さらっと意地悪を言う。】

主人公が何を話したがっているのか、これだけでおおむね理解できた気がするの  
で、お嬢様が個人的な感情をお寄せになるあまり補習の要因となってしまうた、現国の小説  
でございますね」

〈主人公〉

「ちよつと！ そうだけど！

なんか随分余計な情報がくつついてない!!」

● 正面 15センチ

「【くすくすと嬉しそうに。】

主人公の反応がとても可愛らしいので。

また、意地悪を行ってしまった理由を述べていく」

ふふっ♡ 申し訳ありません。

あの作品。

お嬢様が熱中してお読みになり、解釈を語られるお姿が、とても可愛らしかったもので  
すから、つい……♡

【一呼吸おいてから。

優しく続きを促す。

話が脱線しそうになったので、元に戻している】

あの作品が、どうかなさったのですか？」

〈主人公〉

「……………」

しかし、多少嫌味を言いつつも、主人公の話は全部聞いてくれるのがシーラだ。

主人公はこれにきゅんとなって、再び甘えモードに入りたくなる。

だが、今はそれ以上に気になる事があった。

主人公は甘える代わりに、先ほどからずっと気になっていた事を尋ねていく。

〈主人公〉

「……今日さあ、補習受けてきたじゃん」

● 正面 15センチ

「優しく続きを促す。

穏やかに頷いて」

ええ」

〈主人公〉

「そしたら、途中であまねと日菜子が様子見に来てくれたんだ。

ほら。あまねがシーラに連絡したあたりの時刻。

そこで少々、日菜子と解釈バトルになりましたね」

● 正面 15センチ

「優しく続きを促す。

少しだけ驚いた感じで。

もちろん、補習中の主人公のもとを、あまねと日菜子が訪れた事は知っている。

だが『解釈バトル』をした事までは知らなかったのだ。

また『補習には監督がいるはずだが、その監督はどうしたのだろうか？ 終わってから三

人で話したのだろうか?』とも思っている。

主人公もあまねも、若干説明不足な傾向がある。

そのせいで、シーラは補習の様子を完全には把握していない」  
あら……」

〈主人公〉

「まあ、バトルって程でもないんだけどね。

お互いに、『正解っぽい解釈』じゃなくて、『自分なりの解釈』。

日菜子的には『主観多め』の解釈ってやつを話したんだ。

そしたらまあ、わたしと日菜子では随分感想が違ったわけ。

だからちよつと、シーラの意見も聞いてみたくなっちゃって……」

● 正面 15センチ

「【相槌を打って、優しく続きを促す。

また、確認のため、主人公の意図するところを復唱する。

主人公の話に不明な点はいくつがあるが、ひとまずそれはあまり重要な情報ではなさそうだし、そのまま話を聞く」

なるほど。

そのような事がありになったのですね。

だからお嬢様は、日菜子様に続いて、私（わたくし）の意見も聞いてみたくなったと」

ここまで言い終えると、シーラが納得したようにうなずく。

実はシーラ自身には不明な点もあり、話を完全に把握しているわけではない。

だが、それでも真摯に話を聞いてくれる。

説明不足な主人公との付き合いが長いのだ。

### 〈主人公〉

「そうそうそうそう。」

何て言ったらいいのかな……。

どういう聞き方をすればいいのかな……。

……そうだな。

あの作品っていうか『主人公』と『彼女』について、シーラの個人的な意見が聞きたいかな。

わたしと日菜子と同じく、主観多めでよろしく」

だから、このような少々唐突なお願いにも、すぐに対応してくれる。



シーラは一度考えこむように頭上に視線を巡らせたあと、ゆっくりと話し始めた。

● 正面 15センチ

「『なるほど』という感じで。

相槌を打って、自分の意見を述べていく。

シーラとしては件の小説について、主に『授業の題材』『主人公のお気に入り作品』位の認識でいた。

だが、作品について『主観多めの解釈』がなかったわけではない。

『もし主人公に感想を求められたら、こういった事を話そう』と考えていた事はあった。なので、それを思い出しながら話していく』

然様（さよう）でございましたか。

そうですね……。

私（わたくし）が、日菜子様が仰る所の『主観が多め』の解釈を述べるのであれば」

〈主人公〉

「うん」

● 正面 15センチ

「『穏やかでありつつも、比較的さらっと。』

主人公は『小説の主人公』に感情移入しているため、『小説の主人公は、なんとしてでもヒロインと対等になろうとしている。対等になる事こそが、二人にとって最良の結末である』と解釈している。

だが、シーラは『ヒロイン（彼女）』の方に感情移入している。

そのため、主人公の解釈とシーラのそれは、実は大きく違う。

だから、己の『主観多め』の意見を伝えるのは少々申し訳なくもある。

だが、主人公は自分と意見が違った事で怒ったり、へそを曲げたりする人物ではない事も理解している。

なので、さらっと自分の意見を述べていく」

実の所……。

【※】『でくくった部分を※ 少し強調した感じで話す。

『彼女』と『主人公』の部分】

『『彼女』は、『主人公』が思う程、対等になる事にこだわってはいないのでないか』  
と思います」

〈主人公〉

「え？」

主人公、シーラの言葉に、思わず声をあげる。

主人公は一秒前まで、聞き手に専念する決意をしていた。  
具体的には、

『シーラが話し終わるまでは、絶対に相槌を打つ程度にとどめておく』

『それはとにかく話の邪魔をせず、シーラにのびのびと話してもらうためだ』  
と、考えていた。

だが、その計画はもう失敗に終わった。

そのくらいシーラの見解は、主人公にとって『まさかの解釈』だったのだ。

### ● 正面 15センチ

「『穏やかに優しく。』

先ほどの自分の発言を補足していく。

『主観が多め』でよいとの事なので、『小説の主人公＝主人公』『ヒロイン（彼女）＝シーラ』という事で話している。

ここの『彼女』と『主人公』は特に強調しない」

彼女は、主人公の想いを嬉しく、ありがたく受け止め。

心から感謝しています。

ですからその気持ちに報いる為、最大限努力するでしょう。  
それは彼女にとって、当然の事です」

〈主人公〉

「ほおう……？」

しかも、シーラの言葉は、くつきりと断言系だ。  
なので主人公は、

なんだなんだ。

シーラのやつ、わたしが自分の意見を熱く語った結果補習になって。『なんでよ！』って  
むくれてた時には、まあまあ面白がっていたくせに。

実は自分も、なかなかの持論をお持ちではないの。

——実は結構、この作品の事気に入ってたとか？

と、思いつつ、続きを聞かせてもらおう。

●正面 15センチ

「『穏やかに優しく。』

先ほどの自分の発言を補足していく。

『主観が多め』でよいとの事なので、『小説の主人公Ⅱ主人公』『ヒロイン（彼女）Ⅱシーラ』という事で話している」

……ですが。

それはあくまで、主人公の為。

【※』でくくった部分を※ 少し強調した感じで話す】

『主人公』は、二人が『対等になる事』にこだわっておられますが……。

『彼女』は、『対等になれても、なれなくても、自分の気持ちは変わらない』と思っているのではないのでしょうか。

【穏やかに優しく、自分の意見を述べる。】

『小説の主人公Ⅱ主人公』『ヒロイン（彼女）Ⅱシーラ』という事で話している」

たとえば、主人公が最大限尽くして下さった結果、それが叶わずに終わっても。

彼女は主人公の心配はすれど『それで構わない』と受け入れる事でしよう。

私（わたくし）は、そう考えます」

〈主人公〉

「……それはまた、どうして？」

しかし主人公は、ここまで話してもらってなお、シーラの意見を飲み込みきれない。もちろん、シーラの言っている事自体は理解できる。

だが主人公は、これまで散々主張してきた通り『恋人と対等な関係を築く事』を至高としている。

そのせいで『対等でなくともよい』とする意見自体、飲み込めずにいるのだ。なので主人公は、

——うう。

こんな感じだから、わたしは視野が狭いとか言われちゃうのかな。  
大丈夫なんだろうか、こんな体たらくで。  
わたしという経営者は……。

という気分になりつつも、シーラを見上げながらたずねた。

● 正面 15センチ

「【穏やかでありつつも、比較的さらっと。】

あくまでオーダー通りの『シーラならではの意見』である事を強調する」  
それは、私（わたくし）であれば、そのように考えるからです」

〈主人公〉

「えーっ！ それ、主観多めどころか、完全な主観じゃん！」

だが、そんな主人公に、シーラはなおもはっきりと主観を述べてくれる。

シーラはいかにも主人を立ててくれそう、意見が対立しても譲ってくれそうなおしとやかなメイドに見え、それも正解である。

だが、実際は自分の意見がしっかりある方だ。

そして主人公は、シーラのそういったところを頼りにしている。

だから今も聞いてみたのだ。

シーラなら、主人公の意見とも、日菜子の意見とも違うものを与えてくれて。

それが主人公の欠けたところを埋めてくれるのではないか。

と、主人公は期待していたのだ。

● 正面 15センチ

「くすくすと笑いながら。

驚いている主人公が可愛らしいので。

また、この件について自分の意見を述べる事が出来、それを主人公が聞いてくれる事が、とても嬉しいので」

然様（さよう）でございます。

主観です。

【穏やかに優しく。

すでに『主観』を越えて『自分がもし『ヒロイン（彼女）』であれば、どのように考えるか』を、自分と主人公の関係を例に述べていく」

だって……これから例えば、何（なに）かの間違いがあつて。

お嬢様よりも、私（わたくし）の方が、立場が上になるような事があつたとしても。

私（わたくし）がお嬢様を想い、焦がれて。

お側にいたいと願う事に変わりはない。

【一呼吸おいてから。

穏やかに優しく。

『だが、全く対等な関係に興味がないわけではない。対等を目指すべき部分と、そうではなくてもよい部分がある』事を伝えていく」

それを踏まえると、確かに。

『ふさわしい女性になる』という意味では、将来的に『少しでも近づければ』『対等にな



れば』と思いますが……。

『精神的な釣り合いが取れているか、取れていないか』『どちらの立場が上か、下か』という意味での『対等さ』は、あまり重要でないように思えるのです」

〈主人公〉

「ふー……ん……？」

だが、主人公はなおまだ嘸み碎けていない。

シーラがここまで丁寧に解説してくれているのに、

……いや、やっぱ対等であるに越した事はないんじゃないの？  
そしたらさあ、シーラももつと自由に行動しやすくなるし……。

と、自分の意見に固執してしまっているのだ。

● 正面 15センチ

「『穏やかに優しく。』

主人公を優しく見つめながら話しているイメージで。」

自分の一番言いたかったところを話していく」

つまりは。

今後何がどうあろうと、私（わたくし）はお嬢様のお側にいる、という事です。

この先貴方が大きな成功を収められ、今以上の立場になられても。

逆に……思うようにならぬ事があって、少々苦難の多い道を歩む事になったとしても。

私（わたくし）は必ず、貴方様の隣にいる。

それは私（わたくし）の中で、もう決まっている事ですから」

〈主人公〉

「……！」

だが、さすがの主人公も、ここでようやく理解に近づいてきた。

『小説の主人公』と主人公は、想い人とより良い関係になるために躍起になっている。

だが、その想い人であるシーラとヒロインは、現時点の関係の事も、とても大切にして  
くれているようだ。

それゆえに二人は、無理な変化を望んではない。

たとえ、このまま関係に変化が訪れなくても。

あるいは、突然大きすぎる変化がやってきてしまっても……。

『変わらずに接する』と決めているようなのだ。

少なくとも、シーラはこの小説についてそう解釈している。

そしてシーラ自身もまた、主人公に対してそう考えていると、伝えてくれたからだ。

● 正面 15センチ

「優しく微笑んで。

主人公がようやく要領を得たようなので」

ふふふ。

ある意味私（わたし）は。

お嬢様の、永遠（えいえん）のしもべなのかもしれませんね」

〈主人公〉

「そっ、か……。そういう意味で、言ってくれてたんだ……」

だから主人公は、何だか泣きそうになる。

シーラはずっと主人公を応援しながら、今の、この状態も愛してくれている。

それがわかって、涙が出てきたのだ。

今後も、主人公が未来のために努力し続けるのは変わらない。

それでも、主人公にとってはまったくままならない、改善の余地がありすぎる今すら。シーラは楽しんでくれている、愛してくれているという事実は、とても嬉しい事だったのである。

● 正面 15センチ

「『穏やかに優しく。』

主人公を優しく見つめながら話しているイメージで」  
そうです。

私（わたくし）は、お嬢様が思っているよりもずっと。  
お嬢様をお慕いしています。

「ひととき優しく。」

『この関係』とは『主従関係でもあり、恋人関係でもある関係』の事。

シーラにとって、主従関係とは全く悪いものではない。

主が主人公だったおかげで、とても幸せでよいものだとは認識しているので」  
同時に……この関係を愛しておりますから」

さらにシーラは、主人公に繰り返す。

きつとこれから先も、何度でもこう言つて。

主人公を安心させ、自信を与えてくれるのだろう。

そう思ったら、主人公は……真っ先に伝えねばならない事があると気づき、慌ててこう言った。

〈主人公〉

「……わたしも。わたしも一緒！」

今まで、何でももっとよりよくすることに命懸けになってたけど……。

よく考えたら、わたしもシーラと一緒にだった。

わたしもこれから何が起きてもさ。

シーラとは、絶対一緒に居るから。

それは覚えてて、ね！」

● 正面 15センチ

「【穏やかに、嬉しそうに。

主人公が必死に、真剣に思いを伝えてくれる様がとても可愛らしいので】

あら。お嬢様も同じように思ってますか？」

〈主人公〉

「そうだよ！　ずーっと！　ずーっとそう！」

こくこくと何度も頷くと、シーラが微笑む。

それを見て、主人公は思う。

わたしたちって、相変わらずほぼ同じ年には見えなくて、主従関係にしても、主の方がずいぶん頼りない感じの二人だけど……。

ずっと、今よりも良くする努力はしながら。

変わらずずっと一緒にいたいなあ。

……これからもそのために、わたしは生きていくんだろなあ。

と。

● 正面　15センチ

「【少し泣きそうになりながらも、嬉しそうに。

主人公の言葉が、とても嬉しかったので】

……そのように仰って頂けるなんて。

私（わたくし）は、この世で一番の果報者ですね……♡」

そんな主人公に、シーラがささやく。

その声を聞きながら……主人公はまた嬉しくなって、シーラにぎゅっと抱きついた。

シーラ、主人公の左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「とても優しく、愛情をこめて。

主人公とお互いの気持ちを確かめ合って、絆がさらに深まった事が嬉しいので」

愛しておりますよ……お嬢様。

何があっても離れません。

これからもずっと。

永遠（えいえん）に、共にありましようね……♡ ※

【※1回※ 耳にキスする。

軽く、優しいキス】

ちゅ♡

ここでフェードアウトして終了。